

「一貫連携教育の研究」・「教育力向上研究」 一貫連携教育研究所での活動報告（2014年度）

一貫連携教育研究所員 表 弘之

1. はじめに

私は、1996年に追手門学院中・高等学校に採用され、以来18年間、現場での教育実践に当たってきた。今年度（2014年度）新たに組織編制された「一貫連携教育研究所」への出向となった。この研究所での私の研究テーマは、「一貫連携教育の研究」、「教育力の向上の研究」である。この研究テーマでの私の1年間の活動についてまとめた。

2. 研究テーマについて

一貫連携教育の研究、教育力向上の研究について、どういう視点があるのかをまとめたものが、下記の表（10月17日の中間発表時のもの）である。まず、「1 一貫連携教育研究」「2 教育力向上

研究テーマ 全体図

2014.10.17
一貫連携教育研究所
表 弘之



上研究」として、全体図を示したのが、「研究テーマ 全体図」である。

「1 一貫連携教育研究」をさらに具体的な視点と活動に落としたのが「●1-1 一貫連携教育」、同様に「2 教育力向上研究」を具体的な視点と活動におとしたものが「●2-1 教育力向上研究」「●2-2 教育力向上研究」である。研究以外に、大手前中・高等学校のAP生の引率・指導や自校教育テキスト「ブックレット 追手門学院中・高等学校編」の作成など実務的な仕事もあり、それらを「●3-1 その他の活動」とした。

●1-1: 一貫連携教育研究

研究内容	実現のための課題	留意事項(リスクヘッジ)	関係部署とミッション/ビジョン(私案)	主たる実施済項目/私案の留意点
(1) 他私学の研究 (先行事例の研究)	①キャンパス訪問 ②文献研究・調査 (世界の教育哲学・思想・実践に学ぶ)	・他私学と追手門学院との違いの意識化、明確化 ・取り入れるべきものの選別、どのように取り入れるかの視点	・大学 総務課(周年事業) ・初等中等室一貫教育課	・玉川、成蹊、成城の研究と訪問 (6/24~6/25)
(2) 追手門学院の研究 (本学院の歴史、および現場理解)	①自校史、および自校史教育の研究 ②各学園舎訪問 ③ブックレット英木版の作成	・追手門学院の歴史や、その歴史を作り上げてきた教職員・卒業生の思いを知る。 ・現在の生の教育現場、教育活動を学ぶ。 ・教員意識の向上を目指し、一貫連携教育についての今後の展望を模索する。	・子ども園・幼稚園 ・小学校 ・大手前中高等学校 ・中高等学校 ・大学・大学院 ・学院史研究室 (・教育研究所の活動)	・小学校 公開授業・第一回入試説明会(当日および前日までの準備活動ならびに学校生活の視察) ・大手前中高 学習推進・教科主任会議に毎週参加(金曜2限) 第一回入試説明会への参加 法庵講座への参加
(3) 一貫連携教育の具体化 制度設計/実践/評価	①ブレインストーミング ②中長期実践計画の策定 (例 2018年度創立130周年にむけて等) ③一貫連携教育研究所として企画・実践・検証を毎年実施し、実効性の高い教育を提供	・ゴールイメージと年度別達成計画(マイルストーン)を作成する ・各学校・学舎の文化の違いを押さえ、折り合わせながら、一貫連携教育を進める。 ・小学校の公開授業は、教育現場の研修としても、入試広報の戦略としても、労働時間の削減・質の高い教育の提供としても、求年度見学する価値あり。	私案:①研修(教育・経営)を通じて、「総合学園としての追手門学院」を作る。 ②教育活動の根幹は、「授業」であり、 ③各学舎「現場での教育活動」で学び合う。 ゴールイメージある学年を指定し、小学校の公開授業のような研究をそれぞれで学舎で、各自に行い、自学舎・他学舎に出かけ、そこで8名程度ずつでの研究発表・合評会を行う。(年1回) 全体研修会で、学校評価・教員評価・研修を、職能等級の上級者が行い、それぞれの名程度ずつで行う。数年先の予定まで見通しも確保する。これも各学舎に分かれて行う。(年1回)	・一貫連携教育研究所セミナーの開催(6/30) ・一貫連携教育研究所 紀要の作成 ・一貫連携教育研究所 資料の整理・スクリーンへの書籍移動 (私案 留意点) ・各学校での研修と研究所で行う研修との整合性、調整、相乗効果 ・学院の教員育成の中での位置づけ

●2-1: 教育力向上研究

研究内容	実現のための課題	留意事項(リスクヘッジ)	所轄部署とミッション	主たる実施済項目/私案の留意点
(1) 教育理論・実践、 脳科学や心理学知見 先行事例の研究	①教育理論、実践の研究 ②脳科学、心理学の知見の援用 ③他校の実践研究	・教育活動の根幹スタイル研究(対人関係 アドラー教育) ・生徒は一つ存在であり、総合的な視点が大切 ・社会に出て大きく活躍する「人材」づくり	・初等中等室一貫教育課(研修) ・各学舎の研修担当者	(私案 留意点) 「怒る」と「叱る」/「怒る」と「ほめる」 「ほめる」と「みとめる」/「勇気付け」 一人の存在を、一人の存在として認め、多様な観点から評価する 生活という土台、クラスという土台、科学的研究の裏づけと実践のある学習法
(2) 評価・研修制度 実効性向上の研究	①先行研究・論文調査 ②現場教員の意識調査 (学校評価・教員評価・研修の精度向上)	・現場教員の教育力が、総体としての学校全体の教育力になる。 ・現場教員の向上心が、学校全体の教育向上力、ベクトルの傾きになる。 ・教員意欲の向上、実効性のある研修を行うために仕掛けを工夫する。	・初等中等室一貫教育課(研修) ・各学舎の研修担当者	・発表者(表)の受けた今までの研修資料の整理、活用
(3) クラス運営力 向上の研究	①教員意識の改革 ②生徒の共同体感覚の醸成 ③年間取り組みの決定 ④教室という空間のデザイン	・アドラー心理学に基づく関係性の構築 教師と生徒 生徒と生徒 教師と教師 ・「ことばジャーナル」メソッド(菊池省三) ・「かかわる」「関係性の力」の発揮へ	・生活(家庭生活・学校生活)という土台 クラス(共同体感覚・人間関係)という土台 ・有形、無形の枠を確立し、その中での共同体感覚の醸成 ・次の道路(共同体)に向けて、自立的に踏み出す力の育成	・低学年指導研究会への参加(10/11) ・出口先生の活動資料 ・文部科学省、厚生労働省の研究資料

表 弘之：「一貫連携教育の研究」・「教育力向上研究」

●2-2:教育力向上研究

研究内容	実現のための課題	留意事項(リスクヘッジ)	所轄部署とミッション	主たる実施済項目/私案の留意点
(4) 授業力向上の研究	①教科指導力の向上計画(組織的実施) ②校内研究会の実施企画 ③校外研修の実施計画	・入試問題研究 ・実証研究(研究授業) (他の教育活動やHR活動との調整、相乗効果) ・検証の確実な実施(PDCAの確立) ・研修時間を勤務時間内にも確保	学習推進部 教科主任会議 ○教育活動と教育効果を可能な限り数字の上から客観的に分析する。 ○問題把握のミスが対策を誤らせる。	(私案の留意点) ・目の前の生徒の力を確実に伸ばす。 ・生徒が伸びない原因を生徒に帰すのではなく、自分に帰す。 ・組織的実践を大切にす。
(5) 面談力向上の研究	①面談内容の整理 ②心理学の援用 ③コーチング技術の向上	・各時期における面談の目的、内容の明確化 ・面談事前プリントの作成 ・実施計画 (他の教育活動やHR活動との調整、相乗効果)	進路指導部 各担任会 生徒を主体とした現状理解のうえに、生徒ともに歩む教師としての支援(アドラー心理学)	(私案の留意点) ・「ティーチ」から「コーチ」へ ・「自立」させるために、「手をかける」という発想 ・発達段階における指導 ・組織的実践
(6) 進路指導力向上の研究	①世界・日本の現状と教育政策に関する研究 ②進路シラバスのブラッシュアップ(谷川・桑田案) ③各種校外研究会への参加 ④ICT機器の活用	・3年間の進路指導のデザインのブラッシュアップ ・各種補助教材、プリントの整理、蓄積 ・他の教育活動やHR活動との調整、相乗効果	学習推進部・進路指導部・各担任会 3年間6年間の教育活動(精神力・体力・学力)の集大成としての進路実現を目指す。単なる大学進学ではなく、その先にある社会参加・社会改善を目指した進路を実現させる。	・入試結果報告会(6/10) ・低学年指導研究会(10/11)

●3-1:その他の活動

活動内容	実現のための課題	留意事項(リスクヘッジ)	所轄部署とミッション	主たる実施済項目/私案の留意点
(1) AP生の引率	①AP制度の充実 ②出欠管理の補助業務遂行	・追手門コース生の気持ちをも大切にす。 ・大手前中高の生活指導、推薦条件などの理解 ・総合学園としての追手門学院の生徒・学生として育てる。 ・追手門学院としての教育体制の充実	・初等中等寮一貫教育課 ・入試課アサーティブ係 ・大学教務課 ・中高担当者 目の前の生徒こそ大切であり、現場にこそセントがあると考える。面談を通じて生徒の生の声を拾い、今後の制度充実に反映させたい。	・追手門学院の教職員意識の向上 ・今年度できること、来年度行うことなど、具体的な内容の整理、進展
(2) 中高ブックレットの作成(自校教育テキスト)	①資料の読み込み	・年史と自校教育テキストの違い ・歴史観、教育観に対する違い ・解釈の幅と客観性の問題	・学院史研究室 ・外部業者(エトレ)	・年史の読み込み 資料の読み込み ・先輩教員のインタビュー
(3) ICTソフトの習熟 研修会等への参加	①ICTソフトの習熟 ②研修会・講演会への参加	・オフィスにおける情報の共有化は、一貫連携教育の視点からも、効率的労働環境の視点からも必要 ・教育活動の根本である「教師-生徒」の時間確保。特に授業第一の点からもここに資源(人・もの・資金・時間)を集中させ、必ず成果を出させることが必要 ・教員と職員との相互理解、協力体制を構築する	・大阪高校への訪問(6/27) ・大阪高校から大手前中高訪問時の忠告(8/27) (参加した研修会・講演会など) ・ワークショップデザイナー育成プログラム(平田オリザ)(4/12) ・大阪私学教員研修会(8/8) ・安藤忠雄 講演会 ・私学経営研究会 定例セミナー(9/12) ・FDスキルアップセミナー(秦敬治)(10/2)	

ただ、実務的な仕事をしたうえで、すべてについて研究することは難しいため、佐々木実一貫連携教育研究所所長(当時)と相談の上、研究テーマを「1 一貫連携教育研究」については、(1)他私学の研究(2)追手門の研究に、「2 教育力向上研究」については、(2)評価・研修制度 実効性向上の研究(6)進路指導力向上の研究に絞った。

3. 一貫連携教育について

こども園・幼稚園から大学・大学院まで擁する総合学園である以上、一貫教育を行うことは至極

当然のように思われる。また、裏を返せば、総合学園でなければ、一貫教育を行うことはできない。しかし、私は今年玉川学園を訪問するまでは、そういった発想を持ち合わせていなかった。玉川学園を訪問したおり、酒井健司中学部長・教育部長から玉川学園が小中高の12年間について、「4・4・4」制を導入した教育目的と経緯を伺ってはじめて、一貫教育の意義、魅力、そして、総合学園の力について知った次第である。

追手門学院の各『年志』やその他資料を調べると、本学院でも、一貫教育の流れを作ろうとする動きは、中学部設立時からあり、その後何度も試みられていることが分かる。

古くは、昭和33年(1958年)発行の追手門学院『70年志』に、すでに「一貫教育」の文字が見られる。教育内容としては、「教育の基本的方針は同一学園の総合的一貫教育の趣旨に従って、戦後教育の一般的理念を学院の伝統や特性に即せしめていく」(p289)とある。

しかし、『80年志』では、学院教育の一本化について「なかでも本校は小・中・高の一貫教育を本旨とする総合学園でありながら、最近では比較的優秀な多くの生徒が途中で他に移転し、ために一貫教育の実があがらないばかりか、かえって質の低下をきたし、ひいては大学進学の結果にも大きな影響を与え、学院教育の理想にも支障をきたしつつある」(p208)と述べられている。

本格的に一貫教育を目指されたのは、天野利武先生であった。「私学の特色をいかに発揮するか、総合学園としての本学院の一貫教育の実はどうすればあがるのか」と考えられた末、追手門学院創立80周年記念事業の一つとして、教育研究所を構想され、1969年(昭和44年)から教育研究所は活動を始めている。

当初は、運営協議会が4部会(教育研究・教育相談・教職員研修・公開講座)の運営を司り、各部会には、大学の学部・各学校園から、それぞれ2名ずつの委員を選出し、一部会12名、計48名の委員が活動を支えるという非常に大規模なものであった。

また、「教育研究所報 第30号」(1993年5月12日発行)には、設置から発行当時にいたるまでの活動が概要としてまとめられているが、発行時においても、非常に活発に活動されていることが分かる。

しかし、残念ながら、一貫教育については現在も十分に行われているとはいえない状況にある。天野利武先生の作られた教育研究所は、2014年度一貫連携教育研究所として、新たなスタートを切った。一貫連携については、一語のように捉えられがちであるが、「一貫教育」と「連携教育」とはまったくの別物である。連携教育は、地域や他の学校法人などの連携が考えられ、魅力的な部分もあるが、まずは、総合学園の強みを活かすべく、本筋の「一貫教育」を打ち立てるべきであると考えられる。

4. 一貫教育「教育の流れ」をつくるために

一貫教育の実現を考えると、行うべき教育とその教育を受ける人という「教育の流れ」と「人

の流れ」の二つのものがなくてはならない。その順序としては、まずは、行うべき「教育の流れ」を作り、その教育を受ける「人の流れ」を作る必要がある。この章では、「教育の流れ」について考えてみたい。

昭和25年4月10日に行われた高等学校の開校式で吉田千代喜先生は、「私は今日から諸君を紳士として待遇したい」と宣言された。また、新生追手門の礎を築いた八東周吉先生も「教育とは教育しないこと」との名言を残されている。

しかし、吉田千代喜先生の言葉は、小樽商科大学の前身である小樽高等商業学校の初代校長渡邊龍聖によっても用いられている。また、八東周吉先生の言葉も、1900年に発表されたエレン・ケイの『児童の世紀』の一節「教育の最大の秘訣は、教育しないことにある」と酷似している。『[現代]教育学事典』（青木一他編 1988年発行 労働旬報社）によると、エレン・ケイの『児童の世紀』は1906年に日本に紹介され、大正自由教育運動期には基本文献の1つとなった」（p250）とある。

また、両中・高等学校『60年志』では、八東周吉先生が『はくる』に寄稿された「ペスタロッチに還れ」を引用した上で、「八東周吉が、毎号のように執筆した『はくる』では、常に、内面に問いかけるペスタロッチの教育精神が、底流に見られるのである。」（p75）と八東先生とペスタロッチの教育思想の繋がりを指摘している。

児童中心主義の源流は、ルソーの『エミール』（1762年）に求められるようだが、山崎高哉『『エミール』に見る児童中心主義』（日本大百科全書 小学館 2001年）によると、ルソーの『エミール』に見られる教育思想は、「その後ペスタロッチやフレーベルらによって、継承・深化され、20世紀初頭エレン・ケイによって現代に復活させられた。彼女の著作『児童の世紀』（1900年）はドイツで大反響をよび、当時勃興しつつあった芸術教育運動と相呼応して、「児童から」Vom Kinde aus（ドイツ語）を標語に掲げた新教育運動を生んだ」とある。これらを考え合わせれば、八東周吉先生の言葉は、背景にエレン・ケイを踏まえたものと考えるのが自然であろう。

もちろん問題は、誰が一番にこの考えを述べたかにあるのではなく、日本や世界の大きな教育の流れの中で、吉田先生や八東先生の教育思想を位置づけて考えることにある。さらに、それは、われわれ教職員が「よりよい教育実践」を行ううえでの教育的伝統の厚みと理論的背景を得ることに繋がる。

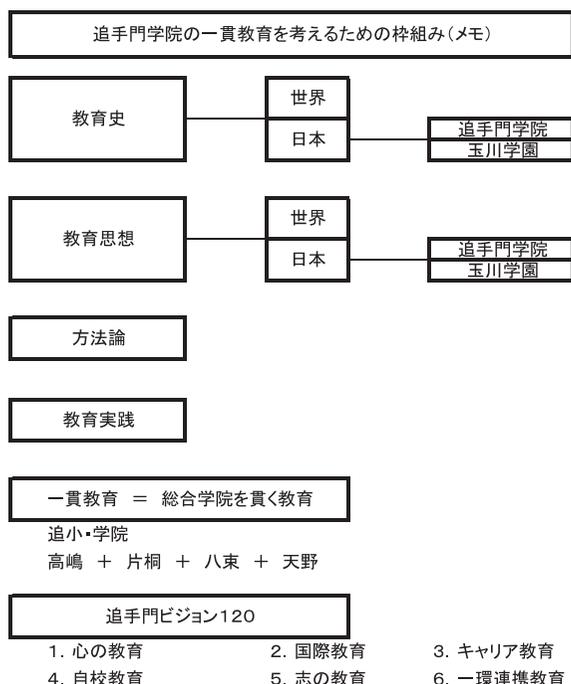
その点で、将軍山会館にある「天野利武先生の人脈図」には、W・ウントなどの人名とともに、源流となる学派や学問的背景となる学派も丁寧に挙げられている。具体的には、構成主義心理学、機能主義心理学、実験心理学、ゲシュタルト心理学などであるが、今後の「総合学園・追手門学院の一貫教育」を考えると、他の先輩諸氏についても、このような学問・教育思想や背景を踏まえるべきである。

成蹊学園は中村春二が創設した学校法人であるが、その敷地の一画に成蹊学園資料館がある。そこでも、やはり、中村春二の生涯や学園の貴重な資料の紹介だけでなく、中村春二の教育思想が、

1921年(大正10年)に行われた「八大教育主張」とともに紹介されていた。

人間は、誰しも時間的にも空間的にも切り離されて存在するわけではない。大きな時代の流れ、教育の流れの中で、共通性や独自性を模索しているのであり、後から教育に参加する若い世代は、これらの流れを学び、意識した上で、新しい時代に対応する新しい教育、教育実践を行うことが、生徒に「よりよい教育を提供すること」に繋がる。

以上の考えを踏まえたとき、下図は大きな意味を持つ。これは、前所長の佐々木実先生から今後の「総合学園・追手門学院」の一貫教育を考えるとときに、こういう枠組みが必要ではないかと示されたものである。



上記図中には、本学院と交流のある玉川学園の名がある。玉川学園は、今後「総合学園・追手門学院」の一貫教育を作るうえで、大いに参考にすべきモデルとなる。本学院との共通点としては、長い歴史を有していること、発祥が小学校から始まったこと、大学学部数や学生数などの規模(6学部7600人)が挙げられる。相違点として、玉川学園の創設者小原國芳が教育実践の中で小学校から大学まで擁する玉川学園に発展させたこと、創設者の子や孫などその流れが今でもあること、ワンキャンパスであること、大学に理系学部(工学部)があることなどが挙げられる。

しかし、最も大切な違いは、小原國芳が掲げた理想の教育「全人教育」をより具体化した教育信条「K-12」が、幼稚園から大学・大学院まで一貫していることである。

これらのことは、今年度玉川学園・成城学園・成蹊学園を訪問するにあたり、学んだことである。なお、この活動報告書の後に「玉川学園・成城学園・成蹊学園訪問 報告書」を添えている。

幸い玉川学園とは、現在教職員交流が続いている。この交流をしっかりと生かし、「総合学園・追手門学院」の一貫教育を作る必要がある。なお、玉川学園と成城学園の視察は、1977年、1978年の二度にわたって行われており、その際の活動が「玉川学園・成城学園見学報告集」「玉川学園・成城学園見学報告集（Ⅱ）」として、旧教育研究所に残されていた。そこには、私が就職した1996年当時も在籍されていた石川陽運先生や公文弘先生などの報告書があったが、このような取り組みが行われていたことを、今回一貫連携教育研究所に出向するまでまったく私は知らなかった。

今後の「総合学園・追手門学院」の一貫教育、すなわち学院教育理念「独立自強・社会有為」な「人財」育成のための「教育の流れ」を作るには、このような背景まで踏まえた分厚い教育思想の研究が不可欠であると考えている。

余談になるが、このような一貫教育を打ち出すことができれば、私学の宿命、生徒募集活動においても強力な訴求ポイントを作ることができる。なぜなら、こども園・幼稚園から大学・大学院までを擁する総合学園は、けっして多くはない。また、「伝統」という長い年月も、他にはまねることができない訴求ポイントになると考えるからである。

企業は、経営戦略のひとつとして成功事例の「同質化戦略」を行う一方、他からの参入を防ぐための「参入障壁」を築くという。（守屋淳『最高の戦略教科書 孫子』日本経済新聞出版社）

教育現場においても、同じことは考えられる。実際、私もいくつかの学校を視察した。すぐにも導入できる取り組みを求めていることである。しかし、企業と学校は、根本的な点で違う。企業では「機械が物をつくる」が、学校は「人が人をつくる」のである。うわべだけの同質化戦略による教育活動では、よりよい教育はできない。私が雲雀丘学園を訪問した折にも、中尾直史校長（当時）から開口一番、そのことを指摘されたのが強烈に印象に残っている。八束周吉の「中正の道」同様、伝統、それも教育思想・信条に裏打ちされ、いまなお息づいている伝統を踏まえ、今の時代、次の時代を見据えた教育活動こそが、よりよい教育の提供に繋がると確信した。

5. 一貫教育「人の流れ」をつくるために

教育という観点で見れば、「人の流れ」は、教育を受けるべき園児・児童・生徒・学生である。「中期経営戦略」でも、送込率・受入率が、具体的な数値で挙げられている。しかし、現場教職員の意識は、十分に育っているとは言いがたい。現場の教職員意識を変え、協同の精神で「総合学園・追手門学院」の一貫教育に責任を持ってあたる必要がある。そのためには、「教育の流れ」を具体的な教育活動に落とし込んだ上に、さらに、教員の人事交流も必要だと考える。これも「玉川学園・成城学園・成蹊学園訪問 報告書」に書いたが、玉川学園 酒井健司中学部長のお話が印象に残っている。教員が、小学校・中学校・高等学校の垣根を越えて、一緒に仕事をする事の大切さ、そして、それが何より児童・生徒にとってよりよい教育の提供に繋がるとのお話は、今後の「総合学園・追手門学院」を考えるうえで、大きなヒントになった。

ただ、各学校園ともに、それぞれの現場で、日々教育活動を行っている。また、それらの活動は、これまでの歴史を背負った取り組みである。性急に事を進めれば、支障をきたしたり、感情的なトラブルになる心配がある。まして、1947年の中学部設立から長い年月、さまざまな取り組みを経ても出来ていない一貫教育である。ここは、学院の創立周年(130周年 140周年 150周年)を意識したゆるやかな長期的な計画と、それを確実に進めるための中期計画、さらに具体化した年次計画であるべき姿の学院にむけて政策を組んでいかないと実現は難しい。現在の追手門学院小学校の校舎は、周年事業を意識しながら、25年間をかけて造られたと東田充司校長から伺った。自分たちの行いたい教育、そして、それを実現する学校設備を、長期的な展望を持って、そのつと修正しながら、全教職員参加の下、話し合いながら着実に造られたのは見習わなくてはならない。

また、教職協同の観点も必要であろう。教員は、教育には強いが、財政には弱く、職員は、その逆である。「よりよい教育を提供する」観点から、お互いの強みを生かし、弱点を補完しあうために、教職協同は必要だ。

追手門学院は、「ワンキャンパス」ではなく、創設者一族の流れもない学校である。そういう点で、可能性は広く、多くの人が教育・経営に参加しやすいが、反面、系統性や継続性に弱く、総合学園としての意識・取り組みは希薄なものになりがちである。「一人ひとりが教育思想に基づいた教育実践を行い、あわせて経営としての視点を持つ」教職員を育てる意識とシステム、特に、「教育の流れ」「人の流れ」を作るための教職員研修制度は、不可欠であると考えてに至った。

いずれにしても、追手門学院が「学校法人」である以上、根本である「教育力」を中心に据え、園児・児童・生徒・学生をしっかり伸ばすという「教育の原点」において、教職員がまとまり、総合学園の経営資源(ヒト・カネ・モノ・情報)を、一貫教育を中心に活用することが、今後の学院の発展に繋がると確信している。

6. 一貫教育「研究と実践の融合を目指す」

2014年度は、佐々木実前所長の新体制の下、新たに希望する所員を募集し、2015年度にむけての準備会合を重ねてきた。来年度は、成城学園教育研究所の活動を参考に、所員は2単位の持ち時間減を行ったうえで、火曜日の午後に所員会議を行う予定である。研究内容としては、「追手門ビジョン120」の6本柱のうち、「心の教育」や「国際教育」、そして「志の教育」「自校教育」につながるような「キャリア教育」を研究しようということになっている。また、それらを夏期合同研修で発表するとともに、小学校の東田充司先生に「追手門学院の源流」に関するご講演をお願いしている。

ただ、近い将来には、これらの研究成果をどのように教育実践に活かすか、「研究と実践」を強く結びつける、あるいは弁証法的に発展させる活動とシステムの開発が必要だ。実践に活かない研究ほどむなしなものはない。研究にかかったコストは、必ず実践に活かさなくてはならない。

学院教育理念「独立自彊・社会有為」の「人財」育成(担任シラバス 進歩門学院高等学校バージョン)

高校1年生

「生徒の成長を中心に捉えなおした教育」

「自分の人生基盤を自ら築く高校生集団/生徒とともに歩み、自身の人生航路を見つめ続ける教師集団」人生ストーリー

高1	4月	5月	6月
大テーマ	中学生から高校生へ生活を切り替えさせる		高校生としての学習スタイルを定着させる
予想される生徒像	六賢生・専願生・併願生で、気持ちの持ち方・心情が大きく異なる。六年一貫生・規模の大きさ 高校生活への慣れ 知っている生徒が多く 安心・学力は大きい 専願生 満足感がある 学力は平均的 中学時代に不登校経験の生徒 併願生 公立高校に落ちたことに強いショック 人生最初の大きな失望感		ゴールデンウィークの連休 → 地元の友達と交友 → 生活リズムが狂う(不登校の再発懸念) 併願 私立高校と公立高校との違いを実感する。(勉強量の違い、生活指導の厳しさの違い、通学時間の違いなど)
生徒活動 PDCA (独立自彊)	自分の気持ちを文庫化		中間考査後 1学期中間点検 気持ち・生活・学習など全項目
生徒主 体活動 ① 生活 (専願生生活) (学校生活) ② 学習 ③ 進路	① 専願生生活(専願生生活) ② 併願生生活(併願生生活) ③ 公立高校生活(公立高校生活) ④ 進路(進路)		
	【4月】 意欲の気持ちを盛り上げ、スムーズにスタートする 新学期スタート、クラス全体を互いに高め合う雰囲気創出 ● 進路意識に目を向ける ● 学習習慣の確立 ● 目標学習時間の確保。(「学習→授業→復習」の黄金サイクル)日々の学習を積み重ねることの大切さを伝える。 ● 高校生としての基本的な学習習慣を早期に身に付ける。 ● 入学入試のハードルの高さを理解し、中学との違いを把握する。 ● 専願生になる喜びや不安を話し合う。進路一人ひとりの状況を確認し、効果的なアドバイスをを行う。 ● ほとんどの生徒は高校生活への不安を感じている。授業態度/部活動との独立/クラスや学校になじめるかの3点が中心 ● 学習習慣定着の遅いなどの時期。「平均的学習量」など、わかりやすい目標を掲げる。帰宅後の学習時間を決めるよう指導することが一つの大きなポイント。平日パターンとの1+その夜、休日パターンなど ● 専願生生活の切り替え時期、努力することこそ才能であることを生徒に伝えたい。		【5月】 ○ 進路中の生活について事前指導を行い、課題取り組み状況を把握する。 ● 5月の連休で生活のリズムが乱れないよう、また、連休明け課題にしっかりと取り組むべきことを指導する必要がある。 ○ 定期考査の意義を把握し、進路前からの計画的に学習する。 ● 定期考査は授業内容の定着確認のために重要であることを理解する。 ● 最初の定期考査に向けて、緊張感をもたせるために、計画的に学習するよう仕向ける。
	【6月】 意欲を養って学習に取り組む習慣を築く ● 学習習慣の定着、進行 ○ 高校最初の模試(実力考査)の取り組みについて、具体的に指導する。 ● 7月までの学習準備の進捗であること、進路目標を確立するなどしてどの程度のレベルの模試の学力を定着させること、進路前に行うことなど。 ○ 各教科の学習方法(学習・復習)についての再確認を行い、取り組みを徹底させる。 ● 4月には見られなかった「学習→授業→復習」の学習スタイルを改めて確認する(よい機会)。 ○ 「生活習慣調査」などで生徒の様子を把握。各教科の学習方法について再度提示するなど、高校生としての学習習慣が身に付いているかどうかを見直しを行う。		【6月】 ● 模試を期して学習に取り組む習慣を築く ● 学習習慣の定着、進行 ○ 高校最初の模試(実力考査)の取り組みについて、具体的に指導する。 ● 7月までの学習準備の進捗であること、進路目標を確立するなどしてどの程度のレベルの模試の学力を定着させること、進路前に行うことなど。 ○ 各教科の学習方法(学習・復習)についての再確認を行い、取り組みを徹底させる。 ● 4月には見られなかった「学習→授業→復習」の学習スタイルを改めて確認する(よい機会)。 ○ 「生活習慣調査」などで生徒の様子を把握。各教科の学習方法について再度提示するなど、高校生としての学習習慣が身に付いているかどうかを見直しを行う。
	【7月】 ● 模試の結果・進路意識を把握 ● 自分のことごとく把握 ● 進路意識、関心・情熱を積極的に把握する。 ● 自分自身を把握 ● 進路意識、関心・情熱を把握する。 ● 自分自身を把握 ● 進路意識、関心・情熱を把握する。 ● 自分自身を把握		【7月】 ● 模試の結果・進路意識を把握 ● 自分のことごとく把握 ● 進路意識、関心・情熱を積極的に把握する。 ● 自分自身を把握 ● 進路意識、関心・情熱を把握する。 ● 自分自身を把握 ● 進路意識、関心・情熱を把握する。 ● 自分自身を把握
上旬	中旬	下旬	上旬
行事 集団行事 (社会有為)	・宿泊オリエンテーション ・球技大会	・外部模試(河合塾) ・中間考査	・教育実習 ・将来を考える日
⑤ クラブ活動 (社会有為)			
教師主 体活動 ⑥ 面談 ⑦ 保護者連携 教師活動 PDCA 担任 教科 検証	・早期に生徒を把握する。 ● 中学校と高校の違いを説明し、高校生に求められる生活・学習習慣を早期に定着させる指導を行う。⇒生徒・全体業者・保護者・懇談会		・クラスの雰囲気注意到、学校行事や学習に専らず全体として集中させる ● 悩みが顕在化する時期でもあるので、面談などで個別に対応する 進路を考えさせる中で、文理選択にも言及しておく
	○ おとなしい生徒 クラスになじみにくい生徒		○ 体力的に部活動についてのが難しそうな生徒 ○ 学習がままならない生徒 ○ 生活リズムが悪化している生徒
	全員面接 事前面接プリント1		
	・クラス懇談会		・第一回PTA総会 ・クラス懇談会
担任	・教育活動表(担任) ・期首面談(学年主任)		
教科	・教育活動表(教科) ・学習オリエンテーション ・期首面談(教科主任)		授業力向上シート (第一回授業アンケート)
検証	外外部部部研研研研研 スタディーサポート	授業アンケート (マープ+記述)	